

科学研究費補助金（若手研究（S））研究進捗評価

課題番号	19672002	研究期間	平成19年度～平成23年度
研究課題名	養育者－子ども間相互行為における責任の文化的形成	研究代表者 (所属・職)	高田 明（京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授）

【平成22年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

養育者と子どもとの相互行為を主に動画資料を通して分析する研究であるが、日本で乳幼児のいる家庭を定期的に訪問するとともに、米国およびアフリカ諸国でも同様のデータの収集に努め、研究代表者による堅実な統率のもと、研究者間での討議も活発に行っており、意欲的に取り組んでいると判断される。

研究成果は学会発表、論文、図書の出版などにより着実に挙げており、海外の学会やシンポジウムなど国際的な発信も活発におこなっている。日本語並びに英語のウェブサイトも立ち上げ、最新情報の提供にも努めている。また、購入したビデオカメラやパソコンを駆使して収録や整理・分析に活用している。

しかし、問題点としては、養育者－子どもの相互行為のなかで「責任」にまだ十分に焦点がしぼれていないこと、また社会環境や文化的多様性を総合的に把握する方向性がやや弱いことが挙げられる。そうしたなかで、当初の計画にはなかった大型類人猿にまで観察対象を拡大することは、適切な研究協力者を加えたとはいえ、一抹の危惧を禁じえない。

【平成24年度 検証結果】

検証結果	研究進捗評価結果と比べ、達成成果に幾分物足りなさが残る。
A-	研究成果は論文、共著書、学会発表などにより着実に公表なされたと言える。研究期間内に開催されたシンポジウム、ワークショップは10回であり、決して十分な回数とは言えないが、その都度海外の研究協力者も参加して、計画研究の統合性は維持されたと判定できる。調査地各所における養育者－乳幼児の相互行為についても、多くの実証データが得られたと判断できる。だが、研究進捗評価でも指摘されているように、「責任」の形成を十分に論じるまでには至ってはならず、文化間比較にも不十分なところが残る。研究代表者ひとりの研究努力は高く評価できるが、この点により総合的に検証結果を判断した。